

文化交流研究所設立の趣旨

東洋の文化と西洋の文化との関係は、日本においてもすでに一世紀この方、多くの識者によつて問題とされてきたが、東洋といえは直ちに日本を中心に考え、極端なものは国粹主義的に日本の文化のみを考慮においていたため、東洋と西洋の関係を真に理解することを妨げていた。

しかるに、日本人が敗戦を体験してより後は、日本中心の考え方の誤謬を国民一般が反省しはじめ、ほんとうの日本人の性格とその世界史的意義とを知ろうという要求をもちはじめている。

他方において、東洋の諸民族もそれぞれ世界における自分の位置を自覚し、政治的独立を唱えるようになってきている。だから、東洋の諸民族もまた改めて東洋を西洋に当面せしめて、東洋および東洋人の性格を問題にしはじめるとは当然である。

6-6
602

このような実情は世界的に反映して、日本人もしくは東洋人の特質を何はかいても両方の文化交流の側面で見きわめようという意図を歐米人もまたもつようになつた。それらの人々の日本人および日本人観は、殆んどすべて彼我の文化比較論の上に基礎を置いて試みられている。

文化の世界的交流という見地に立つて、私たちが日本および日本人の世界的意義を認識することは、単なる穿鑿的な興味の問題でなく、日本および日本人の運命にとつての危機的実情に依じている。私たちの認識要求でなければならぬ。日本人は世界史における平衡ある自分の地位を見出さねばならない。

日本の文化のよき理解者であつたブルノー・タウトが日本の文化について言つてくれた次の言葉は、今日十分に咀嚼反芻の意義をもつている。「日本の如き高い文化民族の精神状態にあつて、自己の歴史に対する平衡を獲得するために最も重要なことは、その平衡の

天野 375

なかに他の文化民族とその運命を共にするということを真に自覚することである。」

従来日本においても、東西文化交渉についての歴史的研究はたしかに多くの業績をあげてきた。それらの貴重な研究を保存し、整理し、更に発展せしめることが必要であると共に、交渉史的研究に基礎を置いた現代の諸国民の生活の実体の全面的な研究、言いかえれば、生産、経営、行政、教育、芸術、総じて世界観の思想的な研究が要望せられるのである。これらの中にも特に、現代の生産技術についての諸文化部門の相互関係の研究が必要であると考えられる。このことは、従来の東西文化交渉史研究において諸民族の手になる産物と言語や宗教の交換交流が主題目であつたことに相応するものである。

文化交流に対する以上の如き認識にもとづいて、世界文化交流の研究所を設立したいと思う。このような企ては、アメリカやインドにおいてすでに着手されているといわれている。日本においてこそ、東西または国際的な諸文化の交流研究がすすめられ、人類の福祉に貢献すべき企てが遂行せらるべきである、これが実に私たちの確信である。

研究所設立の以上の趣旨を御理解下さつて、この企てに御賛同をいただくことを、お願いする次第である。

昭和二十六年十一月



発 起 人 一 同

VI-558